

お勢登場

江戸川乱歩

青空文庫

肺病やみの格太郎は、今日も又細君さいくんにおいてけぼりを食つて、ぼんやりと留守を守っていなければならなかつた。最初の程は、如何いかなお人好よしの彼も、激憤を感じ、それを種たねに離別を目論もくろんだことさえあつただけけれど、病やまいという弱味が段々彼をあきらめつぽくして了しまつた。先の短い自分の事、可愛い子供のことなど考えると、乱暴な真似まねはできなかつた。その点では、第三者である丈だけ、弟の格二かくじろう郎などの方がテキパキした考かんがえを持つていた。彼は兄の弱気を齒痒はがゆがつて、時々意見めいた口を利きくこともあつ

た。

「なぜ兄さんは左様そうなんだろう。僕だつたらとつくに離縁にしてるんだがな。あんな人に憐あわれみをかける所があるんだろうか」

だが、格太郎にとっては、単に憐みという様なことばかりではなかつた。成程なるほど、今おせいを離別すれば、文もんなしの書生しやうつぽに

相違さひない彼女の相手と共に、たちまち其日そのひにも困る身の上になる

ことは知れていたけれど、その憐あわれみもさることながら、彼にはもつと外ほかの理由があつたのだ。子供の行末も無論案じられたし、そ

れに、恥しくて弟などには打うち開けられもしないけれど、彼には、

そんなにされても、まだおせいをあきらめ兼かねる所があつた。それ故ゆゑ、彼女が彼から離れ切つて了うのを恐れて、彼女の不倫を責め

ることさえ遠慮している程なのであった。

おせいの方では、この格太郎の心持を、知り過ぎる程知っていた。大げさに云えば、そこには暗黙の妥協に似たものが成り立っていた。彼女は隠し男との遊戯の暇には、その余力を以て格太郎を愛撫することを忘れないのだった。格太郎にして見れば、この彼女の僅ばかりのおなさけに、不甲斐なくも満足している外はない心持だった。

「でも、子供のことを考えるとね。そう一いちが概がいなことも出来ないよ。この先一年もつか二年もつか知れないが、俺の寿命は極きまっているのだし、そこへ持つて来て母親までなくしては、あんまり子供が可哀相かわいそうだからね。まあもうちつと我慢して見るつもりだ。

なあに、その内にはおせいだって、きつと考え直す時が来るだろうよ」

格太郎はそう答えて、一層弟を齒痒がらせるのを常とした。

だが、格太郎の仏心に引かえて、おせいは考え直すどころか、一日一日と、不倫の恋に溺おぼれて行った。それには、窮迫して、長ながわづら

病がわづらいで寝た切りの、彼女の父親がだしに使われた。彼女は父

親を見舞いに行くのだと称しては、三日にあげず家うちを外そとにした。

果して彼女が里へ帰っているかどうかを検しらべるのは、無論わけ諷わけのな

いことだったけれど、格太郎はそれすらしなかつた。妙な心持で

ある。彼は自分自身に対してさえ、おせいを庇かばう様な態度を取っ

た。

今日もおせいは、朝から念入りの身じまいをして、いそいそと出掛けて行つた。

「里へ帰るのに、お化粧はいらないじゃないか」

そんないやみが、口まで出かかると、格太郎はじつと堪こらえていた。此このごろ頃では、そうして云いい度たいことも云わないうでいる、自分自身のいじらしさに、一種の快感をさえ覚える様になつていた。

細君んさいが出て行つて了うと、彼は所在なさに趣味を持ち出した盆ぼ栽さいいじりを始めるのだった。跣足はだしで庭へ下りて、土にまみれてみると、それでもいくらか心持が楽になつた。又一つには、そうして趣味に夢中になつていさまる様を装うことが、他人に対しても自分に対しても、必要なのであつた。

おひる時分になると、女中が御飯を知らせに来た。

「あのおひるの用意が出来ましたのですが、もうちつと後のちになさいますか」

女中さえ、遠慮勝ちにいたいたし相そうな目で自分を見るのが、格太郎はつらかった。

「ああ、もうそんな時分か。じやおひるとしようか。坊やを呼んで来るといい」

彼は虚勢きよせいを張って、快活らしく答えるのであった。此頃このごろでは、何につけても虚勢が彼の習慣になっていた。

そういう日に限って、女中達の心づくしか、食膳しょくぜんにはいつもより御馳走ごちそうが並ぶのであった。でも格太郎はこの一月ばかりと

いうもの、おいしい御飯をたべたことがなかった。子供の正しよういちも家の冷たい空気に当たると、外の餓鬼がきだい大将しようが俄にわかにしおしおして了うのだった。

「ママどこへ行つたの」

彼はある答えを予期しながら、でも聞いて見ないでは安心しないのである。

「おじいちやまの所へいらつしやいましたの」

女中が答えると、彼は七歳の子供に似合わぬ冷笑の様なものを浮べて、「フン」と云つたきり、御飯をかき込むのであった。子供ながら、それ以上質問を続けることは、父親に遠慮するらしく見えた。それと彼には又彼丈けの虚勢があるのだ。

「パパ、お友達を呼んで来てもいい」

御飯がすんで了うと、正一は甘える様に父親の顔を覗き込のぞんだ。格太郎は、それがいたいけな子供の精一杯の追ついで従しゅうの様な気がして、涙ぐましいいじらしさと、同時に自分自身に対する不快とを感じないではいられなかった。でも、彼の口について出た返事は、いつもの虚勢以外のものではないのだった。

「アア、呼んで来てもいいがね。おとなしく遊ぶんだよ」

父親の許しを受けると、これも又子供の虚勢かも知れないのだが、正一は「嬉しい嬉しい」と叫びながら、さも快活に表の方へ飛び出して行って、間もなく三四人の遊び仲間を引っぱって来た。そして、格太郎がお膳の前で楊枝ようじを使っている処ところへ、子供部屋の

方から、もうドタンバタンという物音が聞え始めた。

二

子供達は、いつまでも子供部屋の中にじつとしていなかた。

鬼ごっこか何かを始めたと見えて部屋から部屋へ走り廻る物音や、女中がそれを制する声などが、格太郎の部屋まで聞えて来た。中には戸惑いをして、彼のうしろの襖ふすまを開ける子供さえあつた。

「アツ、おじさんがいらあ」

彼等は格太郎の顔を見ると、きまり悪わるそう相そうにそんなことを叫ん

で、向うへ逃げて行つた。しまいには正一までが彼の部屋へ闖ちんに

入ゆうした。そして、「ここへ隠れるんだ」などと云いながら、父親の机の下へ身をひそめたりした。

それらの光景を見ると、格太郎はたのもしい感じで、心が一杯になった。そして、ふと、今日は植木いじりをよして、子供らの仲間入りをして遊んで見ようかという気になった。

「坊や、そんなにあばれるのはよしにして、パパが面白いおはなし噺をして上げるから、皆みんなを呼んどいで」

「やあ、嬉しい」

それを聞くと、正一はいきなり机の下から飛び出して、駈けて行った。

「パパは、とてもお噺が上手なんだよ」

やがて正一は、そんなこまつちやくれた紹介をしながら、どうぜ同
勢いひきを引つれた恰好かつこうで、格太郎の部屋へ入つて来た。

「サア、お嘸しとくれ。恐こわいお嘸がいいんだよ」

子供達は、目白押しにそこへ坐つて、好奇の目を輝かしながら、あるものは恥しそうに、おずおずして、格太郎の顔を眺めるのであつた。彼等は格太郎の病氣のことなど知らなかつたし、知つていても子供のことだから、大人の訪問客の様に、いやに用心深い態度など見せなかつた。格太郎にはそれも嬉しいのである。

彼はそこで、此頃になく元氣づいて、子供達の喜び相なお嘸を思い出しながら、「昔ある国によくの深い王様があつたのだよ」と始めるのであつた。一つのお嘸を終つても、子供達は「もつと

もつと」といつて諾きかなかつた。彼は望まれるままに、二つ三つとお嘸とぎの数を重ねて行つた。そうして子供達と一緒にお伽嘸とぎの世界をさまよつてゐる内に、彼は益ますます々上機嫌になつて来るのだつた。

「じゃ、お嘸はよして、今度は隠れん坊をして遊ぼうか。おじさんも入るのだよ」

しまいに、彼はそんなことを云い出した。

「ウン、隠れん坊がいいや」

子供達は我意わがいを得たと云わぬばかりに、立たちどころ処ところに賛成した。

「じゃね、ここの家うちじゆう中で隠れるのだよ。いいかい。さあ、ジヤンケン」

ジャンケンポンと、彼は子供の様にはしやぎ始めるのだった。

それは病気のさせる業わざであつたかも知れない。それとも又、細君の不行跡ふぎようせきに対する、それとなき虚勢であつたかも知れない。いずれにしろ、彼の挙動に、一種の自棄気味やけぎみの混つてゐることは事実だつた。

最初二三度は、彼は態わざと鬼になつて、子供達の無邪気な隠れ場所を探し廻つた。それにあきると隠れる側になつて、子供達と一緒に押入れの中だとか、机の下だとかへ、大きな身体からだを隠そうと骨を折つた。

「もういいか」「まあだだよ」という掛声が、家中に狂気めいて響き渡つた。

正一の声で、すぐ戸の前で囁くのが聞えた。格太郎は見つかり相になると、もう少しじらしてやれという気で、押入れの中にあつた古い長持ながもちの蓋ふたをそつと開いて、その中へ忍び、元の通り蓋をして、息をこらした。中にはフワフワした夜具かなんかが入つていて、丁度寝台にでも寝た様で、居心地が悪くなかつた。

彼が長持の蓋を閉めるのと引違いに、ガラツと重い板戸が開く音がして、

「おじさん、めつけた」

という叫び声が聞えた。

「アラツ、いないよ」

「だって、さつき音がしていたよ、ねえ何々ちゃん」

「あれは、きつと鼠ねずみだよ」

子供達はひそひそ声で無邪気な問答をくり返していたが、（それが密閉された長持の中では、非常に遠くからの様に聞えた）いつまでたつても、薄暗い押入れの中は、ヒツソリして人の氣勢もないので、

「おばけだあ」

と誰かが叫ぶと、ワーツと云つて逃げ出して了つた。そして、遠くの部屋で、

「おじさあん、出ておいでよう」

と口々に呼ぶ声が幽に聞えた。まだその辺の押入れなどを開けて、探している様子だった。

まつ暗な、樟しょうのう脳のう臭い長持の中は、妙に居心地がよかった。格太郎は少年時代の懐なつかしい思出に、ふと涙ぐましくなっていた。この古い長持は、死んだ母親の嫁入り道具の一つだった。彼はそれを舟ふねになぞらえて、よく中へ入って遊んだことを覚えていた。そうしていると、やさしかった母親の顔が、闇の中へ幻の様に浮んで来る気さえした。

だが、気がついて見ると、子供達の方は、探しあぐんでか、ヒツソリして了った様子だった。暫く耳をすましていると、

「つまんないなあ、表へ行つて遊ばない」

どこの子供だか、興ざめ顔に、そんなことを云うのが、ごく幽に聞えて来た。

「パパちやあん」

正一の声であつた。それを最後に彼も表へ出て行く氣勢だつた。格太郎は、それを聞くと、やつと長持を出る氣になつた。飛び出して行つて、じれ切つた子供達を、ウンと驚かせてやろうと思つた。そこで勢いきおい込んで長持の蓋を上げようとすると、どうしたことか、蓋は密閉されたままビクとも動かないのだった。でも、最初は別段何でもない事のもりで、何度もそれを押し試みていたが、その内に恐しい事実が分つて来た。彼は偶然長持の中へと

じ込められて了つたのだつた。

長持の蓋には穴の開いた蝶ちようつがい 交まじの金具がついていて、それが下の突出した金具にはまる仕掛けなのだが、さつき蓋をしめた時、上へ上げてあつたその金具が、偶然おちて、錠前おろを卸したのと同じ形になつてしまつたのだ。昔物の長持は堅い板いたの隅すみ々に鉄てつ板いたをうちつけた、いやという程巖がん 乗じような代物しろものだし、金具も同様に堅けん 牢ろうに出来ているのだから、病身の格太郎には、迎とても打う破ちやぶることなど出来相そうもなかつた。

彼は大声を上げて正一の名を呼びながら、ガタガタと蓋の裏を叩たたいて見た。だが、子供達は、あきらめて表へ遊びに出て了つたのか、何の答えもない。そこで、彼は今度は女中達の名前を連呼

して、出来る丈けの力をふりしぼって、長持の中であれば見たところ、運の悪い時には仕方のないもので、女中共は又井戸端いどばたで油を売っているのか、それとも女中部屋にいても聞えぬのか、これも返事がないのだ。

その押入れのある彼の部屋というのが、最も奥まった位置な上に、ギツシリ密閉された箱の中で叫ぶのでは、二間ま三間向うまで、声を通るかどうかも疑問だった。それに、女中部屋となると、一番遠い台所の側そばにあるのだから、殊更ことさらら耳でもすましていない限り、先ず聞え相もないのだ。

格太郎は、段々うわ上ずった声を出しながら、このまま誰も来ないで、長持の中で死んで了うのではないかと考えた。馬鹿馬鹿しい

そんなことがあるものかと、一方では寧むしろふき出し度い程滑稽こっけいな感じもするのだけれど、それがあながち滑稽でない様にも思われる。気がつくつと、空気に敏感な病氣の彼には、何んだかそれが乏しくなつた様で、もがいたためばかりでなく、一種の息苦しさが感じられる。昔出来の丹念な拵こしらえなので、密閉された長持には、恐らく息の通う隙間すきまもないのに相違なかつた。

彼はそれを思うと、さい前ぜんから過激な運動に、尽きて了つたかと思える力を更らにふりしぼつて、叩いたり蹴つたり、死にももの狂いにあばれて見た。彼が若もし健全な身体の持主だったら、それ程もがけば、長持のどこかへ、一ヶ所位の隙間を作るのは、訳のないことであつたかも知れぬけれど、弱り切つた心臓と、瘦やせ細

この苦しみを一いちじょう場の笑い話として済すまして了うことが出来るのだ。助かる可能性が多い丈けに、彼はあきらめ兼ねた。そして、怖さ苦しきも、それに伴って大きかった。

彼はもがきながら、かすれた声で罪もない女中共のろを呪のろった。息子の正一をさえ呪のろった。距離にすれば恐らく二十間とは隔へだつていない彼等の悪意なき無関心が、悪意なきが故に猶なおよ更さらうらめしく思われた。

闇の中で、息苦しきは刻一刻と募つつて行つた。最早もはや声も出なかつた。引く息ばかりが妙な音を立てて、陸おか上あがつた魚さかなの様に続いた。口が大きく大きく開あいて行つた。そして骸がいこつ骨こつの様な上下しらはの白しら歯はが歯ぐきの根まで現れて来た。そんなことをした所で、何

の甲斐もないと知りつつ、両手の爪は、夢中に蓋の裏を、ガリガリと引搔ひっかいた。爪のはがれることなど、彼はもう意識さえしていなかった。断末魔の苦しみであつた。併し、その際きわになつても、まだ救いの来ることを一縷いちるの望みに、死をあきらめ兼ねていた彼の身の上は、云おう様ようもない残酷なものであつた。それは、どの様な業ごうびよう病びょうに死んだ者も、或あるは死刑囚さえもが、味あじわつたことのない大苦痛と云わねばならなかつた。

四

不倫の妻おせい、恋人との逢瀬おうせから帰つて来たのは、その日

の午後三時頃、丁度格太郎が長持の中で、執念深くも最後の望みを捨て兼ねて、最早や虫の息で、断末魔だんまつまの苦しみをもがいている時だった。

家を出る時は、殆ど夢中で、夫の心持など顧る暇かえりひとまもないのだけれど、彼女とても帰った時には流石さすがにやましい気がしないではなかった。いつになく開け放された玄関などの様子を見ると、日頃ビクビクもので気づかっていた破綻はたんが、今日こそ来たのではないかと、もう心臓おどが躍り出すのだった。

「ただいま只今」

女中の答えを予期しながら、呼んで見たけれど、誰も出迎えなかった。開け放された部屋部屋には人の影もなかった。第一、あ

の出でぶし不精な夫の姿の姿の見えないのがいぶかしかった。

「誰もいないのかい」

茶の間へ来ると、甲かんだか高い声でもう一度呼んで見た。すると、

女中部屋の方から、

「ハイ、ハイ」

と頓とんきよう狂な返事がして、うたた寝でもしていたのか、一人の

女中が脹はれぼつたい顔をして出て来た。

「お前一人なの」

おせいは癬くせの癩かんが起つてくるのを、じつと堪こらえながら聞いた。

「あの、お竹たけどんは裏で洗せん濯たくをしているのでございます」

「で、檀だんな那様は」

「お部屋でございましょう」

「だっていらつしやらないじゃないか」

「あら、そうでございますか」

「なんだね。お前きつと昼寝をしてたんでしよう。困るじゃないか。そして坊やは」

「さあ、さい前まで、お家で遊んでいらしたのですが、あの、檀那樣も御一緒に隠れん坊をなすっていたのでございますよ」

「まあ、檀那樣が、しようがないわね」それを聞くと彼女はやつと日頃の彼女を取返しながら「じゃ、きつと檀那樣も表なんだよ。お前探しといで、いらつしやればそれでいいんだから、お呼びしないでもいいからね」

とげとげしく命令を下して置いて、彼女は自分の居間へ入ると、一寸鏡の前に立つて見てから、さて、着換えを始めるのであった。

そして、今帯を解きにかかろうとした時であつた。ふと耳をすますと、隣の夫の部屋から、ガリガリという妙な物音が聞えて来た。虫が知らせるのか、それがどうも鼠などの音ではない様に思われた。それに、よく聞くと、何だかかすれた人の声さえする様な気がした。

彼女は帯を解くのをやめて、気味の悪いのを辛抱しながら、間の襖あいだを開けて見た。すると、さつきは気づかなかつた、押入れの板戸あの開いていることが分つた。物音はどうやらその中から聞

えて来るらしく思われるのだ。

「助けて呉れ、俺だ」

幽な幽な、あるかなきかのふくみ声ではあったが、それが異様にハッキリとおせいの耳を打った。まぎれもない夫の声なのだ。

「まあ、あなた、そんな長持の中なんかに、一体どうなすつたんですの」

彼女も流石に驚いて長持の側そばへ走り寄った。そして、掛け金をはずしながら、

「ああ、隠れん坊をなすっていたのですね。ほんとうに、つまりないいたずらをなさるものだから……でも、どうしてこれがかかってしまったのでしょうか」

若しおせいが生れつきの悪女であるとしたなら、その本質は、人妻の身で隠し男を拵えることなどよりも、恐らくこうした、悪事を思い立つことのす早ばやさという様な所にあつたのではあるまいか、彼女は掛け金はずして、一寸蓋を持ち上げようとした丈で、何を思ったのか、又元々通りグツと押えつけて、再び掛け金をかけて了つた。その時、中から格太郎が、多分それが精一杯であつたのだろう、併しおせいの感じでは、ごく弱々しい力で、持ち上げる手ごたえがあつた。それを押しつぶす様に、彼女は蓋を閉じて了つたのだ。後に至つて、無慙むざんな夫殺しのことを思い出す度たびごと毎に、最もおせいを悩ましたのは、外の何事よりも、この長持を閉じた時の、夫の弱々しい手ごたえの記憶だつた。彼女に

とつては、それが血みどろでもがき廻る断末魔の光景などよりは、幾層倍も恐しいものに思われたことである。

それは兎も角、とかく長持を元々通りにすると、ピツシヤリと板戸を閉めて、彼女は大急ぎで自分の部屋に帰った。そして、流星に着換えをする程の大胆さはなく、真青まつさおになつて、箏筒たんすの前に坐ると、隣の部屋からの物音を消す為でもある様に、用もない箏筒の抽ひきだし出を、開けたり閉めたりするのだつた。

「こんなことをして、果して自分の身が安全かしら」

それが物狂わしいまで氣に懸かかつた。でも、その際ゆつくり考えて見る余裕などあろう筈もなく、ある場合には、物を思うことすら、どんなに不可能だかということを感じながら、立ったり坐

ったりするばかりであった。とは云うものの、後あとになつて考えた所によつても、彼女のその咄嗟とつきの場合の考えには、少しの粗漏そろうもあつた訳ではなかつた。掛け金は独手ひとりにしまることは分つてゐるのだし、格太郎が子供達と隠れん坊をしていて、誤つて長持の中へとじ込められたであろうことも、子供達や女中共が十分証言して呉れるに相違はなく、長持の中の物音や叫さけび声こゑが聞えなかつたという点も、広い建物のことで気づかなかつたといえばそれまでなのだ。現に女中共でさえ何も知らずにいた程ではないか。

そんな風に深く考えた訳ではなかつたけれど、おせいの悪に鋭い直覚が、理由を考えるまでもなく、「大丈夫だ大丈夫だ」と囁いて呉れるのだつた。

子供を探しにやった女中はまだ戻らなかつた。裏で洗濯をしている女中も、家の中へ入つて来た氣勢はない。早く、今の内に、夫のうなり声や物音が止まってくればいい、そればかりが彼女の頭一杯の願ひだつた。だが、押入れの中の、執念深い物音は、殆ど聞取れぬ程に衰えてはいたけれど、まるで意地の悪いゼンマイ仕掛けの様に、絶え相になつては続いた。気のせいではないかと思つて、押入れの板戸に耳をつけて（それを開くことはどうしても出来なかつた）聞いて見ても、やっぱり物凄い摩擦音は止んではいながつた。そればかりか、恐らく乾き切つてコチコチになつていであろう舌で、殆ど意味をなさぬ世迷言よまいごとをつぶやく氣勢さえ感じられた。それがおせいに対する恐しい呪いの言葉であ

ることは、疑うまでもなかつた。彼女は余りの恐しさに、危く決心をひるがえ翻して長持を開こうかとまで思ったが、併し、そんなことをすれば、一層彼女の立場が取返しのかかぬものになることは分り切つていた。一たん殺意を悟られて了つた今更、どうして彼を助けることが出来よう。

それにしても、長持の中の格太郎の心持はどの様であつたらう。加害者の彼女すら、決心を翻そうかと迷つた程である。併し彼女の想像などは、当人の世にもまれ稀なる大苦悶くもんに比して、千分一、万分一にも足らぬものであつたに相違ない。一たんあきらめかけた所へ、思いがけぬ、たといかんぷ仮令姦婦であるとはいへ、自分の女房が現れて、掛け金はずしさえしたのである。その時の格太郎の大歡喜

は、何に比べるものもなかったであろう。日頃恨うらんでいたおせい
が、この上二重三重の不倫を犯したとしても、まだおつりが来る
程有難く、かたじけなく思われたに相違ない。いかに病弱の身と
はいえ、死の間際まぎわを味つた者にとって、命はそれ程惜しいのだ。
だが、その束つかの間まの歡喜から、彼は更に、絶望などという言葉で
は云い尽せぬ程の、無限むげん地獄へつきおとされて了つたのである。
若し救いの手が来ないで、あのまま死んで了つたとしても、その
苦痛は決してこの世のものではなかったのに、更に更に、幾層倍、
幾十層倍の、云うばかりなき大苦悶は、姦婦の手によつて彼の
上加えられたのである。

おせいには、それ程の苦悶を想像しよう筈はなかったけれど、彼

女の考え得た範圍丈でも、夫の悶死を憐み、彼女の残虐を悔い
ない訳には行かなかつた。でも、悪女の運命的な不倫の心持は、悪
女自身にもどうしようもなかつた。彼女は、いつのまにか静まり
返つて了つた押入れの前に立つて、犠ぎせいしや牲者の死を弔とむらう代りに、
懐しい恋人のおもかげを描いているのだつた。一生遊んで暮せる
以上の夫の遺産、恋人との誰はばからぬ楽しい生活、それを想像
する丈で、死者に対するさばかりの憐あわれみの情を忘れるのには十分
なのだ。

彼女は、かくて取返した、常人には想像することも出来ぬ平静
を以て、次つぎの間まに退くと、脣くちびるの隅に、冷い苦笑をさえ浮べて、さ
で、帯を解きはじめるのであつた。

五

その夜八時頃になると、おせいによつて巧みにも仕組まれた、死体発覚の場面が演じられ、北村家は上を下への大騒ぎとなつた。親戚しんせき、出入の者、医師、警察官、急を聞いてはせつけたそれらの人々で、広い座敷が一杯になつた。検死の形式を略する訳には行かず、態と長持の中にそのままにしてあつた、格太郎の死体のまわりには、やがて係官達が立並んだ。真底から歎なげき悲しんでいる弟の格二郎、偽りの涙に顔を汚よごしたおせい、係官に混つてその席つらなに列つらなつたこの二人が、局外者からは、少しの甲乙もなく、

どの様に愁傷らしく見えたことであろう。

長持は座敷の真中に持ち出され、一警官の手によつて、無造作むぞうさくに蓋が開かれた。五十燭しよつこう光の電燈が、醜く歪んだ、格太郎の苦悶の姿を照し出した。日頃綺麗きれいになでつけた頭髪が、逆立つばかりに乱れた様さま、断末魔そのものの如き手足のひつつり、飛び出した眼球、これ以上に開き様あのない程開いた口、若しおせいの内うちに、悪魔そのものがひそんででもない限り、一目この姿を見たらならば、立たちどころ所に悔悟かいご自白すべき筈である。それにも拘らず、彼女は流石にそれを正視することは出来ない様子であつたが、何の自白をもしなかつたばかりか、白々しい嘘うそ八百を、涙にぬれて申立てるのだ。彼女自身でさえ、どうしてこうも落ちつくことが

出来たのか、仮令一人殺した上の糞度胸くそどきようとはいえ、不思議に思う程であつた。数時間前ぜん、不義の外出から帰つて、玄関にさしかかつた時、あの様に胸騒むねさわがせた彼女とは（その時も已すに十分悪女であつたに相違ないのだが）我ながら別人の観があつた。これを見ると、彼女の身内には、生れながらに、世に恐るべき悪魔が巣喰すくつていて、今その正体を現し始めたものであろうか。これは、のちほど後程彼女が出逢つたある危機に於おける、想像を絶した冷静さに徴ちようしても、外に判断の下し方はない様に見えるのだ。

やがて検死の手續きは、別段の故障なく終り、死体は親族の者の手によつて、長持の中から他の場所へ移された。そしてその時、少しばかり余裕を取返した彼等は、始めて長持の蓋の裏の搔き傷

に注意を向けることが出来たのである。

若し、何の事情も知らず、格太郎の惨死体を目撃せぬ人が見たとしても、その搔き傷は異様に物^{もの}凄^{すご}いものに相違なかつた。そこには死人の恐るべき^{もうしゆう}妄^{もうしゆう}執^{もうしゆう}が、如何なる名画も及ばぬ鮮かさを以て、刻まれているのだ。何^{なんびと}人も一目見て顔をそむけ、二度とそこへ目をやろうとはしない程であつた。

その中で、搔き傷の画面から、ある驚くべきものを発見したのは、当のおせいと格二郎の二人丈であつた。彼等は死骸と一緒に^{べつま}別間に去つた人々のあとに残つて、長持の^{りようたん}両^{りようたん}端^{りようたん}から、蓋の裏に現れた影の様なものに異様な凝視をつづけていた。おお、そこには一体何があつたのであるか。

それは影の様におぼろげに、狂者の筆の様にとどたどしいものではあつたけれど、よく見れば、無数の搔き傷の上を覆つて、一字は大きく、一字は小さく、あるものは斜めに、あるものはやつと判読出来る程の歪み方でまざまざと、「オセイ」の三文字が現もんじれているのであつた。

「姉ねえさんのことですね」

格二郎は凝視の目を、そのままおせいに向けて、低い声で云つた。

「そうですね」

ああ、このように冷静な言葉が、その際のおせいの口をついて出たことは、何と驚くべき事実であつたか。無論、彼女がその文

字の意味を知らぬ筈はないのだ。瀕死ひんしの格太郎が、命の限りを尽して、やっと書くことの出来た、おせいに対する呪いの言葉、最後の「イ」に至つて、その一線を劃かくすると同時に悶死をとげた彼の妄執、彼はそれに続けて、おせいこそ下手人げしゆにんである旨を、如何程か書き度かつたであろうに、不幸そのものの如き格太郎は、それさえ得せずして、千せんしゆう秋の遺恨いこんを抱いだいて、ほし固つて了つたのである。

併し、格二郎にしては、彼自身善人である丈に、そこまで疑念を抱くことは出来なかつた。単なる「オセイ」の三字が何を意味するか、それが下手人を指し示すものであるうとは、想像の外ほかであつた。彼がそこから得た感じは、おせいに対する漠然たる疑惑

と、兄が未憐みれんにも、死しにぎわ際まで彼女のことを忘わすられず、苦悶の指先にその名を書き止めた無慙の気持ばかりであつた。

「まあ、それ程私のことを心配して下すつたのでしうか」

暫くしてから、言外に相手が己に感づいているであろう不倫を悔いた意味をもこめて、おせいはいしみと歎いた。そして、いきなりハンカチを顔にあてて、（どんな名優だつて、これ程そらな空そらな涙みだをこぼし得うるものはないであろう）さめざめと泣くのであつた。

六

格太郎の葬式を済ませると、第一におせいの演じたお芝居は、無論上^{うわ}べだけではあるが、不義の恋人と、切れることであつた。そして、類^{たぐい}なき技巧を以て、格二郎の疑念をはらすことに専念した。しかも、それはある程度まで成功した。仮令一時だつたとはいえ、格二郎はままと妖婦の欺瞞^{ぎまん}に陥^{おちい}つたのである。

かくておせいは、予期以上の分配金に預り、息子の正一と共に、住みなれた邸^{やしき}を売つて、次から次と住所を変え、得意のお芝居の助けをかりて、いつとも知れず、親族達の監視から遠ざかつて行くのだつた。

問題の長持は、おせいが強^しいて貰^ひい受けて、彼女から密^{ひそか}に古道具屋に売払われた。その長持は今何^{なんびと}人の手に納められたことで

あろう。あの搔き瑕きずと不気味な仮名文字かななとが、新しい持主の好奇心を刺戟しげきする様なことはなかつたであらうか。彼は搔き傷にこもる恐しい妄執まがしにふと心戦おののくことはなかつたか。そして又、「オセイ」という不可思議なる三字に、彼は果して如何なる女性を想像したであらう。ともすれば、それは世の醜みにくさを知り初そめぬ、無垢むくの乙女おとめの姿であつたかも知れないのだが。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版1刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第四巻 湖畔亭事件」春陽堂

1926（大正15）年9月

初出：「大衆文藝」

1926（大正15）年7月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：門田裕志

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お勢登場

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>